

信順と疑謗

和讃に云く

「五濁増のときいたり 疑謗のともがらおほくして

道俗ともにあひきらひ 修するをみてはあだをなす。」

これは善導和讃の中に出てくる疑謗過失の現在相を示されたものであります。

五濁の世がますます末代となれば、正しく念仏する金剛心の行者があると、それを見て、嫉み怨み、僧侶も俗人も、競うて、疑謗、疑い謗つて、仇をすると言われるのであります。悲しくもそれはまことに事実であります。善導大師は『法事讃』に「五濁増の時、疑謗多し。道俗相嫌ひて、聞くを用いず。修行するもの有るを見れば、瞋毒を起し、方便破壊し、競ふて怨みを生ず。」と仰せられました。今讃はこれに依られたものであります。

真実の念仏行者は、世尊の真実教に随順し、如来浄土の本願に信順して、如来清浄の心に生かされるものであります。久遠の真実心をこの世に頂いて生きる人であり、ます。でありますから、ほめられ、讃えられていいはずであります。しかるに真実はその反対であります。真実に生きれば生きるほど、嫉まれ悪まれ迫害されるのであります。

承元の法難に、法然上人や親鸞聖人が御流罪になられたのも、真実が真実として大地の上に認められないで、この道俗の疑謗のためにおこったことであります。昔も今もこのことは同一であります。簡単な考え方をしている時、人間は真実に生きねばならぬ、真実に生きれば世の褒者になるとばかり考えています。しかるに生きた世間では決してそうではありません。「疑謗のともがらおほくして、道俗ともにあひきらひ、修するをみてはあだをなす」のであります。

善導和讃には続いて

「本願毀滅のともがらは 生盲聞提となづけたり

大地微塵劫をへて ながく三塗にしづむなり。」

と説かれました。毀滅とは、そしりほろぼすことであります。本願の真実を疑謗するもの、それは自らの悪逆の相にさめないばかりか、一切衆生の依つて以つて生きねばならぬ真実道を滅すものであります。人の世の燈を消し、生死の海の船を沈めるものであります。

この人を一闍提といわれるのであります。一闍提とは梵語であります。これを翻訳して断善根または、信不具足と言われます。善根功德の根を断滅した人のことでもあります。信不具足とは謗法闍提とも言われて、大乘頓教を毀滅し、誹謗して、極悪に至るものことであります。真実の御法を謗するということは、最もおそるべきであります。自ら闇に入るだけではなくて、多くの人を闇に流転せしむるからであります。でありますから、

「大地微塵劫をへて、ながく三塗にしづむなり。」

と仰せられるのであります。これは善導は

「永く沈淪し、大地微塵劫を超過して、未だ三塗の身を離るゝことを得べからず。」

と仰せられました。大地微塵劫とは、あらゆる大地を小さく砕いて、兔毛羊毛の先にいる塵ほどになし、一微塵を以て一劫と数えて、すべての微塵をつくしたのが大地微塵劫であります。本願の法を疑謗するものは、大地微塵劫の間、三塗に沈むと言われるのであります。五逆罪は恐るべきであります、たゞの一劫、無間地獄に入ると読まれるだけであります。しかるに大乘の法を謗るものは、まことに長時永劫に三塗にあると示されるのであります。罪の軽重知るべきであります。

曇鸞大師は、『論註』の中に説かれます。

「経に言く、『五逆の罪人、阿鼻大地獄の中に墮して、具さに一劫の重罪を受く、誹謗正法の人は阿鼻大地獄の中に墮して、此の劫もし尽くれば、復転じて他方の阿鼻大地獄の中に至る、是の如く展転して百千の阿鼻大地獄を逕。』と、仏、出づることを得る時節を記したまはず、誹謗正法の罪極重なるを以ての故なり。」

誹謗正法の人は、恐るべき毒刃を研いで、世間出世間の一切の聖賢を亡ぼし、一切世間の善法を皆断じて無くしようとするものであります。人の世を真の闇として笑わんとする悪魔であります。それ故に、大地微塵劫に地獄に入ると示されるのであります。

念仏するものはまことに頂くべきであります。疑謗せられることを以て、己の念仏の真実であることを実証するが如きは仏道ではありません。しかしながら、真実に念仏すれば、必ず疑謗のともなうことを覚悟しなければなりません。念仏すれば、それによつて俗衆の賞讃を得ることが出来るように思うのはまちがいであります。わけ2て情ないことは、僧俗ともに仇をなすことであります。俗ならばまだしも、その道におり、聖人の徳に衣食する寺院の僧、身は念仏行者たるべき僧分の方が、念仏せず、道を聞かず、ただ高慢にも威張ることを知つて、自らが本願の真実に生きないのみならず、真実に念仏する人を見れば、これを謗り、これを苦しめて、疑謗の刃を向けることであります。これは悲しいことながら、既に長い因襲と墮眠によつて濁悪した現在の有様であります。

自ら停まるものは、他をも停めます。

自ら進む者のみ、他をも進ましむるのであります。

聖人御本典に云く、

「信順を困と為し、疑謗を縁と為して、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さん。」

真実の念仏行者は、必ず淳一相続して停ることを知りません。信順為困、疑謗為縁、これこそ我らに示された唯一の生き方であります。疑謗によつて滅ぶが如きは、真実なるものではない。疑謗為縁とは、疑いや謗に出会えば、それを無くしようとしてもがいたり、策を弄したりするのでなくて、それを縁として、いよく本願の尊き有難さに立ちかえり、ますます如来世尊の教命に信順することであります。火を風があおれば火は盛んになり、帆に風を送れば、船はますます走るのが如く、信順が困となり、疑謗が縁となつて、ますます信順の火を盛んならしむることであります。信心歡喜が増長するのであります。信樂は願力によつて彰われるのであつて、自力や計いに

よつておこるのではありません。願力に根ざす信であるならば、疑謗の縁によつて増長こそすれ、決して消滅するものではないのであります。信は本願力によつて彰われ、本願力は信の上に彰われる。これを「信樂を願力に彰わし」と仰せられるのであります。

大木は冬の寒い地に至らねば出来ません。春の若芽の美しさも、秋錦繡の装いも、それは霜のおりる国でなければ見られぬことであります。念仏行者にも、疑謗の霜が下り、非難攻撃、嫌怨の風雪によらねば、仏法の尊さも美しさも顕れないであります。自ら疑謗をことさら求むるが如きは邪道であります。しかし、大地の真相は信順為因、疑謗為縁より外には、真の生き方のないことを知らしめます。まことにこれ我が聖人の不滅の御遺訓であります。

見ず知らずの人に疑謗せられてみて、はじめて見ず知らずの人の世界を、風評や世間話くらいで、軽々しく批判すべきでないことを知らせて頂くことであります。言われてもいい、言つてはならない。謗られてもいい。謗つてはならない。願うべきは信順の一道であります。